
特集 最近の医療における感染症対策と研究の進歩

2: 院内感染

【巻頭言】

近 藤 裕 子 (徳島大学医学部保健学科看護学専攻)

片 岡 善 彦 (徳島県医師会生涯教育委員)

新聞・テレビ等のニュースで MRSA や VRE による院内感染の発生, それが必要と考えられる死亡や訴訟問題が報道されている。院内感染は, 施設・設備の不備, あるいは医療者の不注意やうっかりミス, 知識不足さらに未熟な手技などが要因となって発生している場合が多い。医療者には, 感染予防に対してエビデンスにもとづく知識と技術を修得し, 治療や看護に当たることが重要である。今回, 保健学科看護学専攻がこの特集を担当することになり, 看護職者, 医師, その他の医療職種に関連する問題として, 院内感染を取り上げ, 院内感染にかかわるさまざまな立場の方たちから, 取り組み活動について報告していただく特集を組んだ。本特集では, 院内感染について4名の方から院内感染にどのように取り組んでいるのか, あるいは院内感染にどのようににかかわっているのかについて報告していただく。

まず, 病院の現場でゼネラルリスクマネージャーとして活躍されている徳島大学医学部・歯学部附属病院安全管理対策室の宮川 操氏に, 徳島大学のリス

クマネージャーとして, 院内感染にどのような関わり方をしているのかについて, 徳島大学病院の感染対策委員会の組織の取り組みを中心に報告していただく。続いて徳島県保健福祉部医療政策課の坂東 淳氏からは, 県内の院内感染の発生状況と県としての対策, 立ち入り状況などについて, データをもとに徳島県内の病院の現状について報告していただく。最後に田中法律事務所の田中浩三氏からは, 院内感染によって起こった訴訟の事例をもとに, どのような関係の中で訴訟が起こり, どのような裁判過程をたどったかについて報告していただく。

院内感染は, すべての病院で最善の注意をはらって予防する必要がある。それには現在の医療環境の中で, どのようにすることによりエビデンスにもとづいた方法で防止することができるかを検討し, 実施していくことが重要である。今後, 院内感染発生のリスクと, 防止対策にかかる経済性とをあきらかにすることや, 日本に応じた感染対策を追求していくことが課題であろう。